

欧米で鯨が特別視される理由の批判的考察

河 島 基 弘

比較文化社会学研究室

A Critical Consideration of the Reasons Why Whales are Seen as Special Creatures in the West

Motohiro KAWASHIMA

Comparative Culture and Sociology

Abstract

Nowadays, many people call themselves animal lovers. Stories of the maltreatment of animals are reported sensationally by the press to attract wide public attention. But all animals are not paid the same attention: the killing of some animals draws more sympathy than others; the experimentation of some animals arouses more indignation than others. Whales are among those 'chosen' animals that are given special consideration, especially in the West. What makes whales so special in human eyes? Why whales, not other animals? In this article, I address these questions by critically examining the alleged uniqueness of whales proposed by a whale protectionist.

題 辞

オーストラリア人：鯨は特別であり、殺してはいけない。捕鯨者は野蛮人だ。

羊：他の社会が鯨について違った見方をしていることを考えれば、それは極めて主観的な意見ではないのかな。生物はすべて特別だというのが、より正確なのではないだろうか。

オーストラリア人：鯨が特別なのは、鯨が特別だと私が信じているからで、それが鯨を特別にするのだ。

羊：メー。。

「偉大な知的論争 (The Great Intellectual Debate)」
(High North Alliance, 1997)

はじめに

近頃、自らを動物愛好家と名乗る人が多い。動物虐待の話はメディアにセンセーショナルに採り上げられ、多くの人の関心を集める。日本では数が少ないが、動物を食用にするのは道徳的に許されないと、肉食を拒否する菜食主義も世界中に数多く存在する。しかし、すべての動物に同じ配慮が払われるわけではない。ある動物の死には他の動物の死よりも同情が集まるし、ある動物に対する実験は他の動物に対する実験よりも世間の怒りを呼ぶ。鯨は、猿、犬、猫などと並んで、特別な配慮を受ける「選ばれた」動物である。

特に西洋では、鯨は大自然の象徴と見られているようであり、鯨には他の動物にはない特別な権利があると主張する人もいる。なぜ人間の眼に鯨が特別に映るのだろうか。なぜ他の動物ではなく鯨なのだろうか。捕鯨のどこに問題があるのだろうか。多くの人が捕鯨に反対する理由として、①鯨は絶滅の危機に瀕している、②鯨は特別な生き物である—の2つを挙げることができる。本論文ではこのうちの後者の主張について、鯨保護の活動家の意見を批判的に分析する中で検討する。その際、動物間に恣意的な序列を設けて、ある種の動物を特別扱いする「種差別」(speciesism) の概念を批判的理論的根拠の中心に据える。

1. ピーター・シンガーの種差別

1975年、オーストラリアの哲学者、ピーター・シンガー (Peter Singer) が画期的な本を出版した。『動物の解放』(*Animal Liberation*) と名付けられたその本は、工場式農場や実験室における動物の酷い扱いをショッキングな写真付きで紹介し、人間の便宜のために動物を搾取することに対して強い異議を申し立てた。シンガーの平易で説得力のある主張は、多くの人々を動物保護運動に駆り立て、『動物の解放』は今日では動物権運動のバイブルとしての地位を獲得している。シンガーの主張の核心は「種差別」(speciesism) の糾弾である。種差別は「自分自身が属する種の利益を擁護する一方で、他の種の利益を否定する偏見と態度」(Singer, 1975: 26) と定義される。ただし、この定義は人間(正確に言えば、人間という動物種) と動物(人間以外の動物種) という二元論に基づいており、動物間にヒエラルキーが存在するのかどうかについて曖昧な点で問題である。そこで本論文では種差別を、人間と人間以外という狭い定義ではなく、動物同士の関係にも言及するという意味で「種の違いに基づく恣意的な差別」と定義し直し、鯨の特殊性に関する言説を吟味したい。

2. 鯨「特別視」の言説

「どのように言い繕っても、捕鯨は殺人であり、殺人は間違っている」。この人目を引くコピーはクジラ・イルカ保護協会 (Whale and Dolphin Conservation Society = WDCC) の新聞全面広告として、1996年5月1日付の英タイムズ紙に掲載された (*The Times*, 1 May 1996)。広告の中で WDCC はフェロー諸島の島民が行うゴンドウクジラ漁を非難し、読者に反捕鯨運動への寄付を募った¹。コピーの注目点は「屠殺」(slaughter) や「殺害」(kill) などの中立的な言葉の代わりに「殺人」(murder) という表現が使われていることである。WDCC の意図は、鯨を人間に見立てることによって、捕鯨を残酷行為に貶めることにある。

鯨は人間と同等、あるいはそれ以上の存在であると考える人もいる。例えば、南極海における日本の調査捕鯨の妨害で有名な環境保護団体、シー・シェパード (Sea Shepherd Conservation Society) 代表のポール・ワトソン (Paul Watson) は「人間族 (humankind) との共存状態に到達する努力の中で、私は鯨族 (whalekind)」を代表している」(Watson, 1994: 164) と主張。さらに、「私は、自分より遥かに優れた生き物 [鯨のこと = 著者注] の運命を決めることを当然視するヒト科の半神半人集団 (a bunch of hominid demi-gods) による、取るに足らない霊長目の争いに飽き飽きしていた」(Watson, 1994: 132) と述べるなど、鯨を人間以上の存在に位置付けている。

「鯨=地球の主人公」説もある。『鯨の国』(*Whale Nation*) と題された本の中で、ヒースコート・ウィリアムズ (Heathcote Williams) は「宇宙から見れば、地球は青い。宇宙から見れば、地球は人間ではなく鯨の領域」(Williams, 1988: 8-9) と美しい詩を紡ぐ。詩には鯨の美しい写真が添えられ、宇宙から見た地球の写真は漆黒の宇宙に青く浮かび上がって印象的である。詩は「青い海は地表の10分の7を覆う。5000万年の微笑を持つ、史上最大の頭脳領域」(同) と続く。うっとりするような詩と息を飲むような美しい写真に溢れたウィリアムズの本を読んだ者は、鯨の魅力に心を奪われずにはいられない。

鯨の特別視はアカデミズムの分野にも浸透している。アメリカの法学教授であるアンソニー・ダマト (Anthony D'Amato) と、アメリカ環境保護庁の専属弁護士のサディール・チョプラ (Sudhir K. Chopra) は、権威ある法律誌、*American Journal of International Law* の1991年1月号に「鯨—その生きる権利の出現」(Whales: Their Emerging Right to Life) というタイトルの論文を発表した。論文は次の書き出しで始まる。

SF 作家はしばしば、宇宙のどこかの惑星で知的生命体を発見したらどうなるかについて考えをめぐらす。こうした生命体に私達はどのように反応するのだろうか……。小説より驚くべきことは、人間より高い知能を持っていると科学者が考える生物が地球上に既に存在するという事実である……。鯨は深遠な数学的詩を含んでいるように思われる言葉で互いに会話をしているのである。(D'Amato & Chopra, 1991: 21)

論文の中でダマトとチョブラ (D' Amato & Chopra, 1991 : 51) は、鯨に生存権を認めるのは「鯨が会社よりも生命に満ち溢れていて (animated)、国際社会よりも共同性が高く (communal)、おそらく最も賢い人間よりも知的である (intelligent)」からであると主張。さらに、絶滅危惧種のホッキョククジラをイヌイット (エスキモー) が捕らないようにするために「イヌイットは食料がより豊かな場所に移住するか、北極農場を作るか、少なくとも暫くの間は食料を買えばよい」(D' Amato & Chopra, 1991 : 61) と提案する。彼らの考えでは、イヌイットの権利よりも、鯨の権利が優先されるのである。

3. CSI 名誉会長、バーストウの主張

西欧人の多くが鯨を特別扱いする理由は何だろうか。「鯨はユニークで特別である (Whales Are Uniquely Special)」と題する小論の中で、国際鯨類保護協会 (Cetacean Society International=CSI) 名誉会長のロビンズ・バーストウ (Robins Barstow) は、鯨は以下の6つの理由で特殊な動物であると論じている (Barstow, 1991)²。

①生物学的特殊性

鯨の仲間には、地球上最大の動物に成長する種類も含まれる。鯨はまた巨大で複雑な脳を持っている。例えば、海洋生物学者のサム・リッジウェイ (Sam Ridgeway) によれば、バンドウイルカは大脳皮質の発達具合などの点で、チンパンジーやゴリラなどの類人猿と人間の間位置する³。

②生態学的特殊性

鯨は人類が進化する遥か前の何百万年間にわたり、海洋生活に適応するようユニークに進化してきた。鯨は海洋の食物連鎖の最上位に位置し、海洋生態系の中で特別な機能を果たしている。

③美的特殊性

鯨は美と優雅さを備え、写真写りも素晴らしい。鯨は人類の歴史において芸術の対象となってきた。鯨は人気があるので、教育の面でも重要な存在である。

④文化的特殊性

鯨は人の精神に対して普遍的魅力を持っている。鯨の神秘性はすべての人に畏怖の念や高揚感を生じさせる。何世紀にもわたる乱獲にも関わらず、鯨は人に対して平和的で寛容である。

⑤政治的特殊性

陸上動物と違って、海を生息場所とする鯨はどの国にも属さない。鯨は国境を越えるので、特別な

対応が必要である。鯨は国際組織が管理するべきである。

⑥象徴的特殊性

鯨ほど環境に対する一般的な懸念を象徴する動物はいない。少なくとも西洋では、鯨の保護は生態系を思いやる試金石である。

バーストウは鯨愛好者の代表であり、また彼の議論は包括的でもあるので、論点を1つ1つ吟味してみるのには価値があることだと考える。以下、鯨・捕鯨問題に関わる他の研究者や活動家の意見、考えにも言及しながら、主に種差別の観点から批判的に考察を進める。

3-1. 生物学的特殊性

鯨類の生物学的特徴として注目されるのは、その巨大さといわゆる知能の高さである。鯨の中に巨大な種類がいるのは事実であり、その大きさを描写するのに力強い比喩表現が使われる。

全長30メートル、体重160トンにもなる地球史上最大のシロナガスクジラを人知がどうして理解できるだろうか。その声は地球上で最も大きく、海中で100マイル先まで届く。その心臓は小型車と同じ大きさであり、その動脈の中を子供が通れるほどである。(Whale Center, 1988 : 3)

次は英国放送協会 (BBC) が2001年に放映したテレビ・ドキュメンタリー、「*The Blue Planet: A Natural History of the Oceans*」(日本名『ブルー・プラネット』)の導入部のナレーションである。

広大な海の中で小さく見えるが、シロナガスクジラは体長30メートル、体重200トンを超え、地球史上最大の動物である。シロナガスクジラは最大の恐竜よりずっと大きく、その舌は象とほぼ同じ重さであり、その心臓は車と同じ大きさである。その血管のいくつかは人間が泳げるほど大きく、その尾だけで小型飛行機の翼と同じ長さである。(BBC, 2001)

巨大な体軀とともに、鯨が特別な動物である理由として頻繁に挙げられるのが知能の高さである。前節でワトソン、ダマトとチョプラの主張を紹介したが、鯨は実際に知能の高い動物なのだろうか。鯨が大きな脳と複雑な大脳皮質を持つことはよく知られている。水族館では、イルカやシャチが水上の輪を通り抜けたり、プールに投げ入れられたボールを取って来たりなどの演技を見ることができる。映画やテレビでは、子供と一緒に泳いだり、人間とコミュニケーションをとったり、溺れる人を助ける鯨やイルカがしばしば登場する。環境主義者が鯨類を「海の人類」「人間の友達」とみなし、特別視したがるのも頷ける。

鯨が高い知性の持ち主であることを唱えた研究者の中で最も有名なのは、アメリカの脳科学者、ジョ

ン・リリー (John C. Lilly) だろう。捕獲したイルカの行動と脳の構造を詳細に調べたリリー (Lilly, 1961) は、イルカには推論する能力や倫理観に加え、仲間や次の世代に知識や経験を伝達できるほどの言語能力があると推測した上で、近い将来には人間とイルカのコミュニケーションが可能になると予言した。その夢はまだ実現されていないが、リリーは、イルカの大活躍を描いた映画で後にテレビ・シリーズにもなった『フリッパー』 (*Flipper*) (1963年制作) の制作協力者に名前を連ねるなど、イルカが賢い動物であるという意識を人々に広める上で大きな役割を果たした。リリーによって、多くの人が鯨やイルカの素晴らしさを知り、リリーの本を読んで、環境主義者の多くが反捕鯨運動に乗り出した。リリーの研究に刺激を受けて、鯨類の研究に踏み出した科学者も多いと言う (大隅, 2001)。その1人が、イルカの言語能力の研究で有名な認知心理学者のルイス・ハーマン (Louis Herman) である。人間とイルカの共通言語である手話を使った実験でハーマンは、イルカが「棒を輪に通せ」と「輪を棒に通せ」という指示の違いを理解できることを示した (Payne, 1995: 205)。この実験結果から、イルカに英文法を理解する能力があることが想定された。

もし知能が脳の大きさだけで測定できるなら、最も知能が高い動物はマッコウクジラということになる。イギリスの研究者、マーガレット・クリノウスカ (Margaret Klinowska) によれば、オスのマッコウクジラの脳重量は7,820グラムに達し、1,500グラムの人間を大きく上回る (Klinowska, 1992: 24-25)。しかし、マッコウクジラの体重はヒトの約500倍であり、脳が重いのは当然とも言える。体重に占める脳重量の割合 (脳重量比) で比べれば、マッコウクジラの指数は0.02であり、2.10のヒトより遥かに低いばかりか、0.08の牛にも劣る (同)。鯨類の中で最高の脳重量比を誇るのはバンドウイルカであり、その指数はヒトの約半分の0.94である。ただし、脳重量比だけで知能の優劣を決めることはできない。

知能を論じる際、脳の質、特に大脳皮質の発達具合が重要である。この点、バンドウイルカのように、ヒトと変わらないほど複雑な大脳皮質を持っている種類もいる。実際、大脳皮質にある神経細胞の密度の点で、イルカとヒトで違いがないことがリリーの研究で明らかになっている (村山, 2009: 150)。しかし、鯨類の脳の構造を詳細に調べると、脳の複雑さに関していくつか疑問が生まれる。クリノウスカ (Klinowska, 1992: 29) によれば、大脳皮質の外側にあり、高度な思考や知性を司ると言われる新皮質を見ると、陸生哺乳類には機能が異なる6つの層があるが、鯨類には5つの層しかなく、部位ごとの機能の相違も見られない。クリノウスカはまた、鯨類は多くの陸生哺乳類が5000万年前に経験した最終段階の脳進化を経ていないと指摘し、鯨類の脳は実は多くの点で原始的であり、陸生哺乳類ではハリネズミやコウモリのレベルであると述べている (Klinowska, 1989: 20)。

鯨の知能を論じる際にもう1つ重要なのは、種としての多様性である。鯨類は、硬い歯を持ち、主に魚やイカを捕らえて食べる歯鯨と、上顎から生えている数百枚の髭板を使って、海水と一緒に飲み込んだプランクトンや小魚をこし取って食べる髭鯨の2種類に大きく分かれるが、脳重量比の点で両者には大きな相違がある。バンドウイルカやシャチに代表される歯鯨は、シロナガスクジラやミンククジラのような髭鯨に比べて脳重量比が高く、餌の探索などでも複雑な行動を見せる⁴。歯鯨が「海の

知識人」と呼ばれる一方で、髭鯨が「海の牛」と蔑視される所以である。

それでは、全体として鯨の知能をどのように評価すれば良いのだろうか。この点、プロクター(Proctor, 1975)は、社会的行為と知能を混同するべきではないと論じる。人間も鯨も社会的動物であり、その結果、仲間と遊んだり、共同行動を取ったりするなどの特質を共有し、ともに高い学習能力とコミュニケーション能力を備えている⁵。しかし、鯨が人間と同等の推論能力を持っているとは考えにくい(同)。さらに重要なのは、そもそもどのように知能を測定するのかという問題である。鯨が本当に高い知性の持ち主かどうかとの問いに対して、ロサンゼルス郡自然史博物館の研究・収集副館長のジョン・ヘイニング(John E. Heyning)は答える。「人間の間でさえ、知能の絶対的な基準はない。他の動物となれば、なおさらである」(著者のインタビュー, 2001)。

このように、鯨の知能については科学者の間で必ずしも合意が得られていないが、知能論争を違った角度から議論するために、鯨が人間を除く他の動物より遥かに高い知性の持ち主であることが証明されたと仮定してみよう。この発見によって、鯨の特別扱いが認められるだろうか。鯨を人間に置き換えて考えてみよう。誰かが「知能テストで高得点を出した生徒は、点数の低い生徒よりも重要であり、大きな権利を持っている」と発言したら、その発言者は間違いなく厳しい批判に晒されるだろう。動物の価値を論じるのに、人間と違った基準を当てはめるべき理由は見当たらない。確かなのは、鯨が水中生活に見事に適応した素晴らしい動物であるという事実であり、種の価値を判断する基準として、知能を物差しに使うことに問題があることが分かる。

なおバーストウは、巨大さと知能の高さから鯨の生物学的特殊性を論じたわけだが、この選択自体が恣意的であるという批判も当然成り立つ。基準は何でも良いが、例えば飛翔能力、視力、柔軟性などに着目すれば、鯨は特殊でも何でも無い。

3-2. 生態学的特殊性

哺乳類でありながら水中に生息する鯨が、ある意味でユニークな存在であることは疑いが無い。このユニークな生活様式、人類学で言う「変則性」(anomaly)は重要である。変則性というのは、普通ではない物、従来の分類に当てはまらない物を指す。アルネ・カラン(Arne Kalland)とブライアン・モーラン(Brian Moeran)は、鯨は変則動物であると主張する(Kalland and Moeran, 1992: 6)。分類学上では鯨は哺乳類であり、肺呼吸をする胎生の温血動物である。同時に、鯨は魚類と同様に足ではなくヒレを持つ水生動物である。このように鯨は、哺乳類と魚類の両方の特徴を持つ越境的な位置に立つ。変則動物は、既存の分類や範疇に収まらない存在であるため、畏怖、恐怖、神秘などの気持ちを人間に呼び起こし、タブー視されることが多い。

変則動物が、世界でどのように認識されているのか調べてみるのも興味深い。例えば、コウモリは哺乳類でありながら、鳥のように空を飛ぶ典型的な変則動物である。コウモリは中国では幸運と幸福の象徴であり、5羽のコウモリ(中国語の発音ではwu-fu)は5つの祝福、すなわち健康、富、幸運、長寿、平穩を表すと言われる(Altringham, 2003: 10-11)。しかし西洋では、コウモリはその外見(羽

のない剥き出しの身体など)と生活スタイル(夜行性で、洞窟や廃墟に生息することなど)から、病気や黒魔術、死、吸血鬼などを連想させ、マイナスのイメージで捉えられている。変則的なものは一般的に、プラス、マイナスどちらにせよ極端な見方をされることが多い。イギリスの人類学者、エドモンド・リーチ(Edmund Leach)の言葉を借りれば、「タブー視されるものは、神聖であり、価値があり、重要であり、強力であり、危険であり、触れてはならず、不潔であり、言葉にするのも憚れるものである」(Leach, 1964: 37-38)。

バーストウによれば、鯨が特別視されるもう1つの生態学的理由は、海洋で食物連鎖の頂点に立つ捕食者であるという事実に由来する。実際、シャチは地球最大の捕食動物であり、大型の鯨さえ獲物とする。生態系の中では、最上位に立つ捕食者は、獲物の数を持続可能な水準に保つ役割を果たす。天敵となる捕食動物がいないと、動物の多くは食糧不足で餓死する限界まで増加してしまうのである。しかし一方で、獲物がいなければ捕食者が餓死してしまうことも事実である。捕食者と獲物は相互に依存しており、生態系の中で捕食者が獲物よりも重要な存在であるということはない。

バーストウ(Barstow, 1991: 7)はまた、人間と鯨は、人間が陸上、鯨が海中というように「地球上で進化の2つの山のピーク」に位置する点で似ているという。しかし、この主張には疑問を投げかけざるを得ない。鯨が自ら置かれた環境の中で素晴らしい進化を遂げたこと、海洋生態系の中でユニークな位置を占めることを認めるとしても、同じことはすべての生物に当てはまる。ある種の生物が過酷な生存競争を長期間にわたって生き抜いてきたという事実は、その生物が環境に見事に適応してきた何よりの証拠である。タコはその形態や生態の点で、海中においてユニークに進化してきたし、「生きて化石」と呼ばれるオウムガイは何億年もの歳月を生き抜いてきた点で、ユニークな存在である。あらゆる種がその置かれた環境の中で特別な存在であり、何らかの役割を果たしている。生態学的にみて、鯨が他の種よりも特別な存在であるということはない。

3-3. 美的特殊性

バーストウの主張の3番目は、鯨の美的価値に関するものである。鯨は審美的動物であるというわけだが、誰もが鯨に同じ価値を見出すと考えるのは誤りであり、ある動物が美しいかどうかは極めて主観的な価値判断であろう。ある人々にとって、鯨は特別な感情を呼び起こす美しい動物かもしれないが、鯨を単なる大きな魚だと考える人もいる。特定の動物に特定の価値を与えるのはその人の自由だが、他人も同じ価値観を持つべきだと考えるのはナイーブ過ぎる。

とは言うものの、多くの人が鯨に魅了されているのも事実である。それでは、なぜ人間の目に鯨は魅力的に映るのだろうか。鯨の虜になるメカニズムはどのようなものだろうか。人とペットの絆に関する論文の中で、キッド(Kidd and Kidd, 1987: 141)は「小さな口、短い手足、大きな頭、見るからに大きな目、頼りない行動」など哺乳類の赤ちゃん特有の特徴は、助けてあげたい、守ってあげたいという大人の反応を刺激すると述べている。この「可愛さへの反応」(cute response)という考えを最初に打ち出したのは、ノーベル賞受賞者のコンラート・ローレンツ(Konrad Lorenz)である。ロー

レンツは、丸い形、柔らかな皮膚、ぎこちない動きなどの赤ちゃんの特徴は大人の目には可愛いらしく映り、こうした反応が幼児に対する親の適切な反応を保証すると論じた (Serpell, 1986 : 61-61)。可愛いというには大き過ぎる種類もあるが、こうした哺乳類の赤ちゃんの特徴が、鯨の特徴そのものであるという事実は興味深い。

可愛さと言えば、鯨と共通点が多い動物に同じ海生哺乳類のアザラシがいる。両動物とも、手足が短く、脂肪をたっぷり蓄えた丸味を帯びた体型をしていて、人を和ませる魅力を持っている。ここで、アザラシが欧米のメディアでどのように採り上げられているのかを簡単に見てみよう。1988年夏、スウェーデンからイギリスにまたがる北海沿岸で、正体不明のウィルスに感染した数多くのゴマフアザラシが打ち上げられているのが発見され、イギリスのメディアで大々的に報道された。瀕死のアザラシの写真や映像が新聞やテレビにあふれ、「アザラシを救おう」キャンペーンが立ち上げられた。イギリスの日曜紙が同問題をどのように扱ったのかを研究したアンダーソン (Anderson, 1997 : 147) によれば、1988年8月だけでメール紙 (*The Mail*) の日曜版が8本、オブザーバー紙 (*The Observer*) が6本、サンデー・タイムズ紙 (*The Sunday Times*) が3本の記事を掲載。記事の中には、「茶色の大きく潤んだ目をしたアザラシは捕食動物であるが、ディズニー映画に登場するキャラクターのように見える」 (*London Evening Standard*, 25 August 1988)、「アザラシの置かれた苦境は、その優しく人懐っこい顔と悲しげな目によって、とても感情に訴えるものである」 (*The Daily Mail*, 25 July 1989) など情緒的なものが多かったと言う (Anderson, 1997 : 149)。日本でも、河川に紛れ込んだアザラシの話がメディアで大きく採り上げられることが多い。アザラシがこれほど注目を集めるのは、人間の目に可愛らしく映るからである。しかし繰り返すが、美的価値観は極めて主観的なものである。さらに言えば、ある動物が美しいからといって、その動物が (人間から見ても) 美的でない動物より特別な存在であるという主張は種差別の非難を免れることができない。

3-4. 文化的特殊性

バーストウの主張の4番目は、鯨の文化的側面に関するものである。バーストウの見解では、鯨は神秘的な雰囲気と気立ての優しさのために万人受けする普遍的な魅力を持っている。実際、鯨について書かれた書籍や新聞記事、鯨について語られたインタビューでは、「神秘性」 (mystery) 「神秘的な」 (mysterious) などの表現が多く見られる。次は英タイムズ紙 (*The Times*, 18 June 1996) の記事からの引用である。記事の見出しは「深海の眠り」 (Sleep of the Deep)。

鯨の最大の栄光はその神秘性にある。深海の素晴らしい海獣。深海の知を身に付けた海の知識人。鯨は「太古の、夢も見えないような、何者にも妨げられない眠り」の中に置かれるべきだ。

鯨の神秘性は、実際に鯨を間近に見た場合にさらに大きくなるようである。鯨類保護協会 (Whale Conservation Institute=WCI) 副代表のイアン・カー (Iain Kerr) は鯨をすぐ近くで見る機会に恵

まれた幸運について語る。「海に潜ると、スクールバスと同じサイズの動物が近づいて来てあなたを見つめる。それはあなたの世界観を確実に変える」(著者のインタビュー, 2001)。

タイムズの記事もカーの言葉も、鯨の神秘性を海と結びつけていることに注目したい。海は広大かつ深遠であり、探検し尽くされた陸地と違って、人類にとって未知の領域である。そこは不思議な生き物と怪物の棲む世界である。未知の存在は謎めいていて、私達の想像力をかき立てる。グリーンピース・イギリスの元議長で、グリーンピース・インターナショナルの代表も務めたピート・ウィルキンソン (Pete Wilkinson) は言う。

海は、誰もが何の疑いもなく見つめるべき最も素晴らしい領域だと思う。海はあなたにこれまでと違った世界観をもたらす。海を見れば、「宇宙船地球号」(Spaceship Earth)という概念が理解できる。海が本物なのは、そこであなたは大自然のなすがままの存在に過ぎないからである……。海で出会う鯨は本当に驚くべきものである。自律し、自己充足していて、知的である。鯨を謎めいた存在にしているのは海である。(著者のインタビュー, 2001)

海と聞いて自由を連想する人もいる。シー・シェパードのワトソン (Watson, 1994: 229) は言う。

海は私にとって自由を意味する。完全で、完結し、解放的な自由。人類の抑圧的な法律からの自由、厄介事からの自由、邪魔されずに考えに耽る自由。最も大切なのは、海に出れば、私は地球と海、そこに棲む生き物を守ることができる自由が手に入ることだ。

2つの引用から、海はある種の高揚感や超越感を人間心理にもたらす特別な働きがあることが分かる。それでは、海の何がこのような不思議な感覚を呼び起こすのだろうか。何物にも視界を妨げられない絶対的な開放感だろうか。あるいは海中では視界が利かないことと何か関係があるのだろうか。周知のように、海水は水と塩から構成され、その水は世界中で宗教儀式に広く使われる。宗教学者のミルチャ・エリアーデ (Mircea Eliade) は、すべての潜在性を秘める水は生命の象徴であると述べている (Eliade, 1958)。水はあらゆる種の容器であり、あらゆる存在の源である。水は神聖視され、多くの社会で浄化の道具に使われる。例えばキリスト教では、水は洗礼式で重要な役割を果たす。ヒンズー教において、ガンジス川は生と再生の場所として特別な意味を持っている。水は万物を浄化し、新しい生命を育む。人間心理における水の役割に関してフィン・リンジ (Finn Lynge) は母体の羊水と海水との類似点を指摘する (Lynge, 1993: 42-43)。水は私達すべてが生まれる場所であり、人を引きつける不思議な力があるというわけである。それでは、塩はどうだろうか。面白いことに、塩も社会によっては浄化の象徴である。日本では、相撲の力士は立ち会いの前に塩で土俵を清め、神への尊崇の念を示す。

バーストウによれば、鯨が文化的に特別なもう1つの理由は、その優しい性質である。ザトウクジ

ラが複雑な「唄」を歌うことを発見したことで有名なロジャー・ペイン (Roger Payne) は言う。

鯨が優しいのは、恐れを感じずに生命を見つめたり、平穏な気持ちで世界に向き合うことができるからである……鯨が私の心を捉えるのは、こうした静寂感であり、ゆったりした生活、攻撃的でない力である。(Payne, 1995: 21)

アメリカ鯨類協会 (American Cetacean Society=ACS) 会員であるダイアン・ハスタッド (Diane Hustad) は、バハ・カリフォルニアでコククジラに魅了された経験を次のように話す。「彼らは単なる不格好な動物ではありません。彼らは本当に優しく船の近くまで浮上して来ます。彼らは本当に強いけれど、とても優しいのです」(著者のインタビュー, 2001)。「心優しい巨人」のイメージには少なくとも2000年の歴史がある。例えば、古代ギリシア人は文学の中で、鯨やイルカの優しい性質について称賛している (Dietz, 1987: 147)⁶。

何世紀にもわたる乱獲にも関わらず、鯨が人間に対して攻撃的に出ることがほとんどない理由については様々な意見がある。ペイン (Payne, 1995) は、鯨が寛容なのは恐怖心が発達していないためであると見ている。一方、前述のリリー (Lilly, 1978) は、鯨が人間を挑発しないのは、自らの体験と仲間からの情報で、人間の残酷さを熟知しているからだと推測している。しかし、鯨が草食動物ではなく、肉食動物であるという事実を忘れるべきではない。鯨が友好的で遊び好きな動物であると信じている人が多いが、前述のヘイニング (著者のインタビュー, 2001) の言葉を借りれば、それは「よくある思い違い」であり、「実際の鯨は、人間や多くの動物と同様、仲間を苛めたり、殺したりするのである。また、村山 (2009: 123-24) は、ヨットが転覆して漂流した人がボートをイルカにつつかれて怖い思いをしたという話を紹介し、イルカは好奇心が高いだけで、そもそも我々を「人間」と認識しているかどうか分からないと述べている。

3-5. 政治的特殊性

次に、鯨の政治的側面を見てみよう。バーストウ (Barstow, 1991: 5) は「国内で飼育される家畜と違って、鯨は野生動物であり、国際的管理下に置かれるべき渡りの習性を持つ」と言う。この指摘は一見もっともである。実際、環境主義者はしばしば、日本やノルウェーの捕鯨に反対する理由として、「共通財産としての鯨」論を展開する。例えば、前述のウィルキンソンは「鯨は共有資源であり、特定の国に属さない。鯨は海の共通財産である」と主張する (著者のインタビュー, 2001)。「共通財産としての鯨」論によって導かれるのは、鯨の管理は各国の自由裁量に任せるのではなく、国際捕鯨委員会 (International Whaling Commission=IWC) のような国際組織が責任を負うべきであるという主張である⁷。環境主義者の考えでは、たとえ鯨が捕鯨国の排他的経済水域で見つかったとしても、捕鯨国に独占的な捕獲権が付与されることはない。なぜなら、移動性動物の鯨は反捕鯨国の海域にも進出するからである。

それでは、鯨は共通財産として扱われるべきであるという主張は実際に成り立つのだろうか。公海の鯨がどの国にも属さない共通資源であるという点では、捕鯨国と反捕鯨国の見解は一致している。しかし、ここで問題になるのは、同じ理屈がすべての動物に当てはまることである。動物は、餌を求めて国境を越えるのが通常である。鹿、狐、ネズミすべてが、人間が決めた人工的な国境に捉われない。餌や休息場所を求めて、何千キロも移動する渡り鳥も同様である。そもそも、国境という考え自体、人間が任意に決めたものであり、人間以外の動物は、人工的で恣意的な国境を意識しない。好きな時に、好きな所を動き回る動物には国境は存在しない。以上のことから、鯨が政治的に特殊であるという主張には問題が多いことが分かる。

3-6. 象徴的特殊性

バーストウの最後の論点は鯨の象徴的特殊性である。象徴は極めて曖昧な概念であり、その定義、使用方法とも幅が広い。象徴の研究が学問の大きな柱になっている人類学では、クロード・レヴィ＝ストロース(Claude Levi-Strauss)、エドモンド・リーチ(Edmund Leach)、ビクター・ターナー(Victor Turner)、クリフォード・ギアツ(Clifford Geertz)などが、神話や儀式を含む人間の行動を分析する道具として、象徴という概念の把握に努めてきた。広義の意味では、象徴は何か他のものを指したり、表したりする行為や物事のことである。象徴は、様々な人が同じ象徴に様々な意味を付与する多義的な概念である。

それでは、鯨は何を象徴しているのだろうか。ストット(Stoett, 1997: 28)は、鯨が象徴するのは「自然の素晴らしさと人間の愚かさの両方」と言う。前者の意味では、ケンドール捕鯨博物館(Kendall Whaling Museum = KWM。2001年、ニュー・ベッドフォード捕鯨博物館に統合)の学芸員であるマイケル・ダイアー(Michael P. Dyer)の説明が典型的である。ダイアーは言う。「偉大で、怪物的で、強力な最後の自然。人間の経験より偉大な何か。人間のコントロールの及ばない何か」(著者のインタビュー, 2001)。鯨は「海洋における神秘的で、驚異的で、生命を育むものすべての象徴である」(Ellis, 1992: 462から引用)と見る者もいる。しかし、鯨が最も輝いて見えるのは、後者の愚かさの意味、すなわちグリーンピースの野生動物運動家、アンディ・オタウェイ(Andy Ottaway)が言うように「鯨の生存が、人類の略奪的な破壊から地球を守る闘いを象徴する」(Greenpeace, 1992: 1から引用)時かもしれない。鯨は、環境破壊、貧富の格差拡大、核兵器による人類消滅の危機など、資本主義と科学技術の発達をもたらした負の側面が露わになった20世紀後半、啓蒙的な役割を果たすようになった。陰鬱な現実と直面した人類が、平和主義、優しさ、周囲の環境との調和など鯨が持つと言われる特質の中に、救済を求めたのも無理はない。近代化の破壊的な側面を危惧する人にとっては、鯨は地球環境の悪化をもたらした経済至上主義とは正反対の価値観を代弁したのである(森田, 1994: 389)。あるいは鯨は、人類が自然と共存しながら静かで調和的な生活を送っていた「失われた世界」、現代人の心に深い傷を残すストレスや緊張などから解放された「理想郷」として機能しているのかもしれない。

鯨の象徴性をさらに考察するために、次の2つの発言を検討してみよう。1つはWCIのカーによる「鯨は偉大な導管の役割を持っていて、困難な問題を話し合うための梃子の役割を果たす種である」(著者のインタビュー, 2001)との発言。もう1つはACS代表のケイティ・ペンランド(Katy Penland)の「鯨は海のカナリアのようなもので、海健康状態の指標となっている」(著者のインタビュー, 2001)という発言である。最初の発言が示唆しているのは、鯨の保護は1動物種の保護にとどまらず、生物多様性の減少や自然破壊などの問題に対して人類の目を開く役目を持つという確信である。「鯨を救えずして、どうして地球を救うことができるのか」という1972年の国連人間環境会議(ストックホルム会議)で唱えられたスローガンは、この文脈で理解されるべきものである。2番目の「鯨=カナリア論」は最初のもつと関係しているが、より実用的な価値を鯨に見出そうというものである。すなわち、カナリアが炭坑内の空気の状態を知らせる警報として用いられるのと同様に、鯨の個体数が海の健全性を示すという考えである。ここでは、鯨は海面下で何が起きているのかを知らせるバロメーターとして捉えられている。

鯨が海健康状態の指標となりえるのは事実かもしれない。しかし、それは珊瑚礁であれ、イワシであれ、海洋生物すべてに当てはまることである。加えて、世界中の人すべてが鯨の象徴的価値に同意するとは思えない。敬虔なヒンズー教徒にとって、神聖で特別な動物は牛であり、モンゴル人にとっては民族の誇りやアイデンティティを象徴するのは馬である。

4. 種差別は許されるか

バーストウは、鯨を他の動物より抜き出した特殊な存在であると考え、自分の考えを正当化するために、他の動物には欠けていて、鯨独自のものであると考えた6つの特徴を挙げた。しかし、鯨は本当にユニークな存在なのだろうか。鯨が特別ユニークな存在ではないことを示すために、他の動物の特徴を検討してみよう。すべての動物がユニークであり、そのために検討の対象とすることができるが、ここでは多くの人に人気があり、反捕鯨を国是とするオーストラリアの代表的な動物であるカンガルーを例に挙げて議論してみたいと思う。

以下は、バーストウの6つの論点に基づいて著者が考えたカンガルーのユニークな特徴である。カンガルーは母親の腹部にある育児嚢の中で赤ちゃんを育てる有袋類であり、その姿は人間が赤ちゃんを抱いたり、背負ったりして育てるのと似ている。加えて、カンガルーは2足で走る点でもユニークである(①生物学的特殊性)。カンガルーは特殊な進化を遂げ、オーストラリアだけに生息する点でもユニークである(②生態学的特殊性)。カンガルーは、オーストラリアを代表する航空会社であるカンタス航空がロゴに用いるほど芸術的にも価値が高い(③美的特殊性)。カンガルーは平和な動物であり、人間の精神にアピールする魅力を持っている(④文化的特殊性)。カンガルーはオーストラリアの州境を乗り越え、先住民のアボリジニと中央政府の共通財産であるという点でもユニークである(⑤政治的的特殊性)。アボリジニの中にはカンガルーを自然の象徴と見る者も多い(⑥象徴的的特殊性)⁸。結論と

して、カンガルーが特別な動物であることは明白であり、その捕獲や駆除は永久に禁止されるべきである。

以上のことから分かるように、カンガルーはバーストウの6つの論点すべてを満たす動物である。しかし現実には、羊の飼育に必要な牧草を食い荒らすという理由で、毎年数百万頭が害獣として駆除されている (Kangaroo Industry Association of Australia, 2009)。多くのオーストラリア人にとって、カンガルーは厄介者以外の何者でもない。ところが、鯨の話になると、オーストラリア人の態度は一変する。オーストラリア人はカンガルーの駆除を正当化できるだろうか。この点について、種差別のイデオログであるシンガーは「その質問はすべてのオーストラリア人を困惑させる」(Singer, 1984: 3)とした上で、カンガルー駆除と捕鯨は倫理的には何ら変わらないと断じる。シンガーによれば、オーストラリア人がカンガルーと鯨に対して一貫した態度を取らないのは、オーストラリアという国の利害の反映である。つまり、大多数の、特にヨーロッパ系のオーストラリア人にとって、カンガルーは農民の利害と衝突する脅威であるが、鯨はオーストラリアの漁師にとって影響は軽微であり、そのため扱いが異なるというのである (Singer, 1984)。

ある動物種を他の動物種より高く位置付ける道徳的根拠とは何だろう。この疑問に対して、クラップハム (Clapham, 1997: 126) は、動物保護運動の中で「鯨は良いスタートになる」と明快である。環境保全や動物保護について言えば、何もしないより何かした方が良いのは当然である。鯨の保護が時の経過とともに、他の動物の保護に広がっていくのであれば、なおさらである。この「おこぼれ効果」(trickle down effect) のシナリオにも一理ある。しかし、鯨の特別扱いは「えこひいき」の誹りを免れないし、最悪の場合は、鯨だけを特別扱いし、同じような苦境にある動物の苦しみに目を閉ざす「選択的無関心」(Serpell, 1986: 157) につながる恐れもあり、特別扱いは問題を孕んでいる。

おわりに

本論文は、バーストウの6つの論点(生物学的特殊性、生態学的特殊性、美的特殊性、文化的特殊性、政治的特殊性、象徴的特殊性)を下敷きに、関係者の意見や主張を織り交ぜながら、鯨が人間の目に魅力的に映る理由について批判的に論じてきた。鯨の特別扱いは、種の違いに基づく恣意的な差別(種差別)という点で問題であり、また、鯨のユニークさを強調する言説には一方的な思い込みが多い。

実際、反捕鯨論者の主張が説得力に欠ける点は、反捕鯨論者自身が認めているようである。捕鯨に関するオーストラリアの国家プロジェクトチームの報告書である『*A Universal Metaphor: Australia's Opposition to Commercial Whaling* (Report of the National Task Force on Whaling)』

(Environment Australia, 1997)がその好例である。報告書は、商業捕鯨の恒久的な禁止を目指すオーストラリア政府に理論的根拠を与えるために作成されたものだが、その目的は不幸なことに裏目に出た。商業捕鯨の非を論じる長い議論の後で、報告書は「結局のところ、なぜ鯨が特別なのかを定義す

るより、鯨が特別であるという広範な意見があることを認識する方が大切である」と結論付けている。鯨が特別な生き物であることの理論化を放棄したと思われる同報告書は、題辞のジョークのように、捕鯨推進論者の嘲笑の対象となった。

最後に、誤解を避ける意味も含めて、この問題についての著者の立ち位置、すなわち鯨観・動物観について短く言及したい。本論文の中で著者は、鯨擁護論者・反捕鯨論者の主張を種差別と批判してきたが、だからといって捕鯨推進の立場は取らない。むしろ捕鯨には反対である。動物を殺さないに越したことはないからである。また、日本の捕鯨推進論者がしばしば口にする「捕鯨は日本の伝統文化」との主張に対しては、伝統のあることと倫理的にそれが正しいことは別であるというのが著者の考えである。著者の立場を一言で言えば、「何事も特別扱いはいけない」ということになるだろうか。捕鯨の倫理問題についての詳しい議論に興味のある方は、著者の論文「Anti-Whaling and Speciesism」(河島, 2007)を参照してほしい。

〔原稿提出日 平成21年9月15日〕
〔修正原稿提出日 平成21年11月6日〕

注

- 1 フェロー諸島はデンマークの保護領で、スコットランドの北約320キロに位置する。寒冷地にある島は作物の栽培に不向きであり、島民は漁業に依存している。島はグリンド (grind) と呼ばれるゴンドウクジラ漁の長い歴史を持っている。島民は獲物を島の入江まで追い込み、カギ形の鎌やナイフでとどめを刺す。漁は公開で行われ、ゴンドウクジラが流血したり、痙攣したりする光景が見られる (Sanderson, 1994)。
- 2 実際には、バーストウが小論の中で 鯨の特殊性として挙げたのは5つの点である。しかし、1996年にハワイのマウイ島で開かれた第4回「鯨を生かそう会議」(Whales Alive Conference) では、そのうちの1点を2つに分け、6点を挙げて講演している。本書はバーストウの講演に倣って、鯨の特殊性を6点に分けて論じる。
- 3 イルカは鯨の一種であり、学術的には、成長しても4メートルに満たない鯨がイルカと分類される。
- 4 例えば、シャチの脳重量比は0.09であるが、ナガスクジラのそれは0.01に過ぎない (Klinowska, 1992: 25)。
- 5 同じ鯨でも、歯鯨は集団生活を送るが、髭鯨は母子を除き、単独で行動するという違いがある。
- 6 この点に関して村山 (2009) は、鯨が巨大で恐ろしい怪物と見られていたのに対し、イルカは愛情深い海の贈り物と見られていたと論じている。
- 7 鯨が乱獲された理由の1つは、誰もが好きだけ捕獲できる「共通財産」と見なされたためである。特に、1962年まで行われ、総割当量に達するまで捕鯨国が捕獲を競った「捕鯨オリンピック」が鯨類にとって大打撃となった。これはまさにG.ハーディン (Hardin, 1968) が「共有地の悲劇」(the tragedy of the commons) と呼んだものである。皮肉なことに今度は、この悲劇が捕鯨者に降りかかり、環境主義者が捕鯨に反対する口実となっている。
- 8 カンガルーは、国を代表する鳥のエミュとともに、オーストラリアの公式シンボル「コート・オブ・アームズ」(Coat of Arms) の図案にも採り入れられている。オーストラリアの新聞、ヘラルド・サン紙 (*The Herald Sun*, 30 January 2002) は、カンガルーはアボリジニの神聖なシンボルであり、オーストラリア政府が国家のシンボルとして使うのは「文化的略奪」であるとする決議をアボリジニの長老達が出したことを報じている。

引用文献

- Altringham, J. D. (2003) *British Bats*. London: Harper Collins Publishers.
Anderson, A. (1997) *Media, Culture and the Environment*. New Brunswick, NJ, Rutgers University Press.
Barstow, R. (1991) 'Whales Are Uniquely Special', pp. 4-7 in Whale and Dolphin Conservation Society (ed) *Why*

Whales?

- Barstow, R. (1996) ‘“Why Whales?” Breakthrough to a Broader Ethic’, Presented at the 4th Annual ‘Whales Alive Conference’, Maui, HI, 25 January.
- BBC and the Discovery Channel (2001) *The Blue Planet: A Natural History of the Oceans*.
- Clapham, P. (1997) *Whales*. Grantown-on-Spey, Scotland: Colin Baxter.
- Clark, J. B. (1963) *Flipper*. Metro-Goldwyn-Meyer, USA.
- D’Amato, A. and S. K. Chopra (1991) ‘Whales: Their Emerging Right to Life’, *American Journal of International Law* 85: 21-62.
- Dietz, T. (1987) *Whales & Man: Adventures with the Giants of the Deep*. Dublin, NH: Yankee Books.
- Dyer, Michael P. (2001) Curator of the Kendall Whaling Museum, Sharon, Massachusetts, USA (interview by the author, 21 August 2001).
- Eliade, M (1958) *Patterns in Comparative Religion*. London: Sheed and Ward.
- Ellis, R. (1992) *Men and Whales*. London: Robert Hale.
- Environment Australia (1997) *A Universal Metaphor: Australia’s Opposition to Commercial Whaling* (Report of the National Task Force on Whaling), URL (consulted July 2003): <http://ea.gov.au>
- Greenpeace (1992) *The Whale Killers*.
- Hardin, G. J. (1968) ‘The Tragedy of the Commons’, *Science* 162 (13 December): 1243-48.
- The Herald Sun* (2002) ‘The Roo Is Taboo, Australians Told’, 30 January.
- Heyning, John E. (2001) Deputy Director of Research and Collections and Curator of Mammals, Natural History Museums of Los Angeles County, Los Angeles, California, USA (interview by the author, 6 September 2001).
- High North Alliance (1997) ‘The Great Intellectual Debate’ (Cartoons) in *The International Harpoon* No.3, 24 October.
- Hustad, Diane (2001) American Cetacean Society, San Pedro, California, USA (interview by the author, 5 September 2001).
- Kalland, A. and B. Moeran (1992) *Japanese Whaling: End of an Era?* London: Curzon Press.
- Kangaroo Industry Association of Australia (2009) ‘Background Information’ URL (consulted April 2009): <http://www.kangaroo-industry.asn.au>
- 河島基弘 (2007) 「Anti-Whaling and Speciesism」『神戸国際大学紀要』第73号所収、1-14頁
- Kerr, Iain, Vice President/CEO of Whale Conservation Institute, Lincoln, Massachusetts, USA (interview by the author, 18 September 2001).
- Kidd, A. H. and R. M. Kidd (1987) ‘Seeking a Theory of the Human/Companion Animal Bond’, *Anthrozoös* 1 (3): 140-45.
- Klinowska, M. (1989) ‘How Brainy Are Cetaceans?’, *Oceanus* 32: 19-20.
- Klinowska, M. (1992) ‘Brains, Behaviour and Intelligence in Cetaceans (Whales, Dolphins and Porpoises)’, pp. 23-37 in Ö. D. Jónsson (ed) *Whales and Ethics*. Reykjavík: University Press, University of Iceland.
- Leach, E. (1964) ‘Anthropological Aspects of Language: Animal Categories and Verbal Abuse’, pp.23-63 in E. H. Lenneberg (ed) *New Directions in the Study of Language*. Cambridge, MA: The M. I. T Press.
- Lilly, J. C. (1961) *Man and Dolphin*. Garden City, NY: Doubleday & Company.
- Lilly, J. C. (1978) *Communication between Man and Dolphin: The Possibilities of Talking with Other Species*. New York: Julian Press.
- Lynge, F. (1993) *Arctic Wars: Animal Rights, Endangered Peoples*. Translated by M. Stenbaek. Hanover, NH: University Press of New England.
- 森田勝昭 (1994) 『鯨と捕鯨の文化史』名古屋大学出版会
- 村山 司 (2009) 『イルカー生態、六感、人との関わり』中央公論新社
- 大隅清治 (2000) 日本鯨類研究所 (鯨研) 理事長 (現顧問)、東京 (著者によるインタビュー、2000年11月21日)
- Payne, R. (1995) *Among Whales*. New York: Scribner.

- Penland, Katy (2001) President of American Cetacean Society, Los Angeles, California, USA (interview by the author, 6 September 2001).
- Proctor, S. J. (1975) 'Whales: Their Story', Vancouver Public Aquarium Newsletter xix (4).
- Sanderson, K. (1994) 'Grind—Ambiguity and Pressure to Conform: Faroese Whaling and the Anti-Whaling Protest', pp.187-201 in M. M. R. Freeman and U. P. Kreuter (eds) *Elephants and Whales: Resources for Whom?* Basel, Switzerland: Gordon and Breach Science Publishers.
- Serpell, J. (1986) *In the Company of Animals: A Study of Human-Animal Relationships*. Oxford: Basil Blackwell.
- Singer, P. (1975) *Animal Liberation: Towards an End to Man's Inhumanity to Animals*. London: Paladin Granada Publishing.
- Singer, P. (1984) 'Whales and the Japanese', pp.1-5 in A. Sibatani (ed) *Environment, Man, Science and Technology in Japan*. The Japanese Studies Centre.
- Stoett, P. J. (1997) *The International Politics of Whaling*. Vancouver, Canada: UBC Press.
- The Times* (1996) Whale and Dolphin Conservation Society 'Stop Him: Save Whales!' (advertisement), 1 May.
- The Times* (1996) 'Sleep of the Deep', 18 June.
- Watson, P. (1994) *Ocean Warrior: My Battle to End the Illegal Slaughter on the High Seas*. Toronto, Canada: Key Porter Books.
- Whale Center (1988) 'Whale Center's Tenth Anniversary', Whale Center Journal 11(2)
- Wilkinson, Pete (2001) former Chairman of Greenpeace UK, Halesworth, Suffolk, England (interview by the author, 29 May 2001).
- Williams, H. (1988) *Whale Nation*. London: Jonathan Cape.